

- 22) *De mente*, cap. II, [68]
 23) *De mente*, cap. V, [84]
 24) *De sap.*, II, [32] [33]
 25) *De sap.*, II, [33]
 26) Cassirer, E., *op. cit.*, S. 20.

意見　クザーヌスにおける「弁論家」と「職人」

近藤 恒一

私は能力の限界ゆえに、ただ藺田氏の提題との関連において、クザーヌスの三部作 *Idiota* 篇における「弁論家」と「職人」について感じたことの若干を述べるにとどめたい。

Idiota 篇 (1550) の三人の対話人物のうち、「哲学者」は当時のアリストテレス派のスコラ哲学者をさし、「弁論家」(雄弁家) はヒューマニストをさすだろうとされるが、同感である。ただし *Idiota* 篇では、ヒューマニストの *devotio* が切りすてられ、ヒューマニスト像が一面化されているように思われる。ヒューマニズムにはさまざまな傾向がみられるが、たとえばペトルルカやエラスムスという代表的ヒューマニストをとりあげてみても、かれらの基本的立場はキリスト教的ヒューマニズムとして特徴づけられ、ペトルルカの立場は *literata devotio* ということばに集約される (*Sen.*, I, 5)。多少とも論争的性格をもつ著作は、どうしても論争相手を一面化し戯画化する傾向におちいりやすいが、この傾向はヒューマニストのスコラ学者批判にはいっそう顕著にみられるように思う。研究者として用心して取り扱うべき点のひとつであろう。

「弁論家」がイタリア・ルネサンスに特徴的な人間タイプのひとつであるとすれば、*Idiota* とよばれる「さじつくり職人」もまたそうであろう。——古代・中世においては、*vita activa* にたいし *vita contemplativa* が圧倒的優位をあたえられていたので、手仕事にたずさわる「職人」が哲学書のなかで主役になることはまずありえな

かったであろう。これが可能になるには、イタリア・ルネサンスという新しい文化的風土の出現が必要だったのではあるまいか。

15世紀前半のイタリアでは、ブルネッレスキ、ドナテッロ、マサッチョら偉大な「職人」（こんにちいう芸術家）の活躍によって美術分野のルネサンス時代がはじまる。かれらは「職人」としての制作活動によってのみならず理論面でも、「職人仕事」つまり芸術を、最高の「学」にまで高めようとする。すでにギベルティは彫刻や絵画を「多くの学科やさまざまな技術的熟達によって飾られた学（*scienza*）であり、ほかのあらゆる学芸にまさる最高の創造」とみなしていた（*Commentario primo*）。のちにレオナルドも絵画を、あらゆる人間活動の最高位に置く（『パリ手稿』A 99 r.）。「画家の学」は神的で、画家の精神は神の精神に似ており、神の創造になる大自然のさまざまな実相を自由に創り出していくことができるとされる（*Lu.* 68）。そしてクザーヌスと同世代のアルベルティは、偉大な「職人」かつヒューマニストで、「職人」文化とヒューマニズム文化とを一身に統一していた。かれらはその芸術活動と理論活動によって、従前は軽蔑または軽視されていた〈*artes mechanicae*〉を評価しなおし、これを〈*artes liberales*〉や〈*artes speculativae*〉と同列に、あるいはそれ以上に位置づけようとしたのである。このような要求や運動は、のちのいわゆる科学革命を準備し、科学革命の重要な要因のひとつとなる。

Idiota 篇における「職人」も、以上のような歴史的な文脈のなかに置き戻してみると、イタリア・ルネサンスに特徴的な人間タイプのひとつといえよう。もちろん、クザーヌスの *Idiota* をこの面からのみ理解しようとするのは、あまりにも一面的にすぎるし、*Idiota* 像の浅薄化にもなろう。しかし「職人」を哲学的対話篇の主人公にしたという発想は、イタリア・ルネサンスという知的風土のなかではじめて可能になったことではあるまいか。

最後に「ことば」との関連でひと言。ルネサンスの偉大な「職人」たちが芸術を最高の学とみなそうするとき、この主張のねらいのひとつは、哲学的探究の地平の拡大である。——哲学的探究は、ことばによる探究やことばによる表現活動（著述活動）に限られるものではない。生きた哲学的営みは、大学や書物のそと、「職人」の芸術的製作活動をつうじて、あるいは「さじつくり職人」のつましい手仕事をつうじてもなされうる。